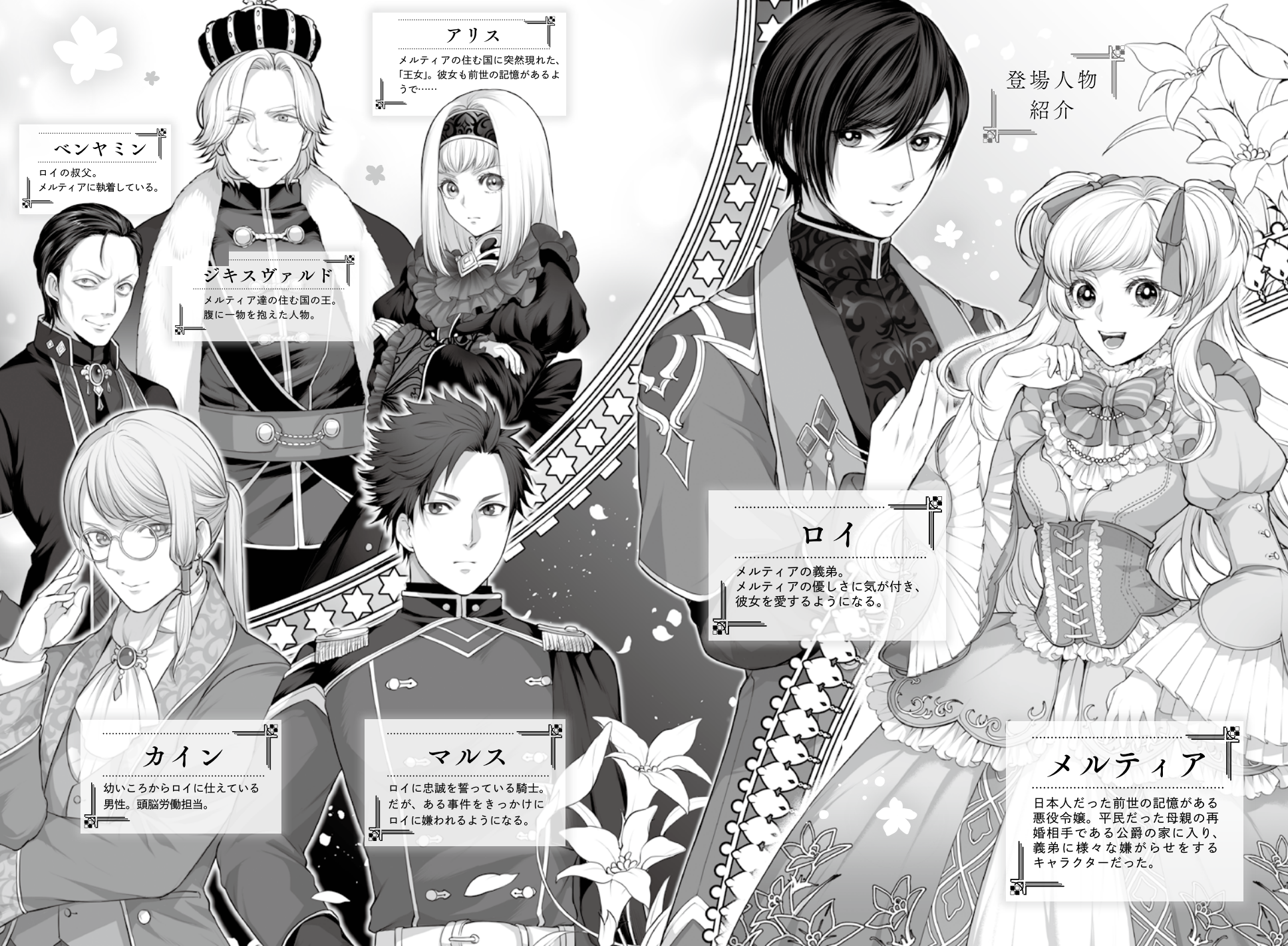
義弟を虐(しいた)げて殺される運命の
悪役令嬢は何故(なぜ)か彼に溺愛される


登場人物紹介
ベンヤミン
ロイの叔父。
メルティアに執着している。
アリス
メルティアの住む国に突然現れた、「王女」。彼女も前世の記憶があるようで……
ジキスヴァルド
メルティア達の住む国の王。
腹に一物を抱えた人物。
ロイ
メルティアの義弟。
メルティアの優しさに気が付き、彼女を愛するようになる。
カイン
幼いころからロイに仕えている男性。頭脳労働担当。
マルス
ロイに忠誠を誓っている騎士。
だが、ある事件をきっかけにロイに嫌われるようになる。
メルティア
日本人だった前世の記憶がある悪役令嬢。平民だった母親の再婚相手である公爵の家に入り、義弟に様々な嫌がらせをするキャラクターだった。

第一章　子ども時代 前編

「――奥様が離れで亡くなられました」
「は？　お母様はお養父様と新婚旅行に行ったはずでしょう？」
夜中に叩き起こされて混乱しながら言い返すと、見慣れないメイドは首を振った。
「私が申しあげた奥様というのは、オルフェンス公爵閣下の正妻であらせられるフィリーナ様のことでございます」
「せ、正妻？　……なんの冗談よ。お養父様は独身ではなかったの!?」

＊　＊　＊

大学の始業式の帰り道、車に轢かれ、私が生まれ変わったこの世界は悲惨だった。
文明レベルは前世で言うところの中世で、そもそもの生活が苦しい。
その上、私の母は歌姫という、この国の最下層に位置する存在だったのだ。
歌姫――身体を売らなくても生計を立てられる娼婦。

それでも私が生まれている以上、母ですら身体を売らないわけにはいかなかったのだ。
だから死にものぐるいで活路を探した。
幼い私が立てる計略に、少女のように無垢な母は喜んで協力してくれる。彼女が貴族の男と恋人になった時には胸を撫で下ろした。
貴族の男――オルフェンス公爵は知識も教養もない母を愛してくれている。
むしろ、そこを愛してくれているように思う。母は無邪気で無垢で、娘としてのひいき目をなしにしても壮絶に美しい。たとえ追い出されることになったとしても、引き際さえ間違えなければ愛人年金くらいはもらえるだろう。
……なんていうのは、甘い考えだったらしい。
まさか、オルフェンス公爵に実は正妻がいて、しかもその正妻が病人で、子どもと一緒に離れに閉じ込められていただなんて夢にも考えなかった！
「……悪夢だわ」
私は幸せになりたかったけれど、そのために誰かの不幸を願ったわけじゃない。
それなのに、私が案内された離れの一室には地獄が現出していた。
本邸とは隔絶した粗末な内装の黴臭い部屋のベッドに、静かに横たわる女性がいる。
その周りに侍るのは、女性の死を嘆く者たち。
私の存在に気づくと、ベッドの前で項垂れていた赤髪の少年がくるりと振り返って私を睨みつけた。憎悪に満ちた目だ。

「貴様！　娼婦の娘が何の権利があってここへ来た⁉」
「マルス、落ち着いてください！」
「落ち着いていられるか⁉　フィリーナ様はこいつらのせいでッ！」
赤髪の少年は私に飛びかからんばかりだった。それを、傍の水色の髪の少年が押し留めている。
私をここへ連れてきたメイドによると、正妻には一人息子がいるらしい。
この二人は、その息子ではなさそうだ。
もう一人、死者の傍らに侍る黒髪の少年がいた。
「おまえたち、静かにしろ」
その少年の声はさほど大きくはない。
けれど、従わなくてはと思わせる何かがあった。
命じられたわけでもない私まで息を詰めてしまう。
二人の少年は勿論ぴたりと口を閉ざし、つかみ合いをやめる。
「あなたが僕の義姉上になった方ですか？」
その落ち着き払った声を聞いた瞬間の衝撃は筆舌に尽くしがたかった。
胸が高鳴り、ぞくりと鳥肌が立つ。
少年が顔を上げた。恐ろしく整った端整な顔立ちに、吸い込まれそうな紫水晶の目が嵌まっている。見覚えなんかないはずなのに、彼を知っているような奇妙な感覚に襲われた。
会ったことがあるなら、こんなに綺麗な子を忘れるはずがないのに。

「初めまして、義姉上。僕はロイ・フォン・オルフェンスと言います」
そう言って彼が浮かべた微笑みを見ると、頭の芯が痺れるような感覚を受ける。けれど、それ以前に彼の名乗った名前に衝撃を受けて、すぐに強烈な陶酔感から抜け出せた。
「……ロイ？」
「はい、義姉上」
「うそ……」
「何か不審な点でもあるでしょうか？」
ない。見覚えがある理由に気がついただけだ。私は彼を挿絵という形で見たことがある。
前世、彼を小説で読んだことがあるのだと、気づいたのだ。
というか、推しだった。たぶん、間違いない。
オルフェンスという姓を聞いた時点で気づくべきだったのかもしれない。
――でも、この世界に生まれ変わって十二年。生きるだけで精一杯だったのだ。
「義姉上？」
彼が顔を覗き込むように首を傾げたので、私は驚いてのけぞる。
魔性の美貌と描写されるその容色は、幼い今も有効らしい。
視線を逸らしながら、嘘でも本当でもないことを言う。
「義弟がいると知らなかったから驚いたのよ……正妻がいることも知らなかったし」
「嘘だ！　おまえたちがフィリーナ様をこの寂しい場所に追いやったんだ！」

声を荒らげるのは赤髪の少年。先程マルスと呼ばれていた。
彼のことも小説で読んだ覚えがある。
やがてロイの第一の騎士として忠誠を誓う、剣聖マルスだろう。
そうなると、もう一人の少年の正体にも薄々予想がつく。
ロイのためにすべての闇を背負って死ぬ男、カイン。
「違うわ。私たちは何もしていない。お母様だって知らなかったはずだわ」
「悪女め！　穢らわしい娼婦めが！　おまえらなんて地獄へ落ちろ！」
「……聞く耳を持たない人に何を言っても仕方ないわね」
喚き叫ぶマルスに、舌打ちを堪える。
ロイが明確に排斥されるようになったのは、お母様と私がここへやってきてからなのだろう。
でも私たちは本当に知らなかったし――それは間違いなくお養父様の望みだったはず。
おそらくこの世界は前世で好んで読んだ『光の王女』という小説の世界だ。
市井で生まれ育った少女アリスが、光の精霊を継承したことで見出されて、王女として貴族社会にデビューするロマンス小説である。
光の精霊とは、本来は玉座に就く者が継承するべき存在。
王の精霊を継承したアリスを巡って、数々の男たちが様々な理由で相争う。
そのうちの一人がロイ・フォン・オルフェンス。彼はオルフェンス家の一人息子として生まれながら父親に愛されず冷遇され、悪役である義理の姉にすべてを奪われ虐げられる。

やがて死にものぐるいですべてを奪い返すものの、癒えることのない傷を心と身体に抱え続ける美しき青年公爵。
その悪役の義姉こそが、どうやら私らしい。
ロイの過去編にちらりと出てきて、ロイに目一杯トラウマを植え付けた後に惨たらしく死ぬキャラクターだった。
「……メルティアお嬢様、奥様の亡骸をいかがいたしましょう」
「いかがって。普通はどうするものなのか知らないわ、私」
ロイたちの味方らしきメイドに聞かれるが、そう答えるしかない。
私がかつていた貧民街では死者は専用の穴に放り込んでおき、定期的に共同墓地に埋め直した。
死者が多すぎる時には燃やしてしまう。火葬というよりはゴミ処理に近い扱いだ。
母親の亡骸にそんな扱いをすれば、ロイの憎悪は更に深まるだろう。
……あんなに好きだった小説の、あんなに好きだったキャラと出会った時にはもう嫌われているだなんて、運が悪すぎて叫びだしそう。
申し訳なくて、気まずくて、ロイの顔を見られない。
『光の王女』は変わった小説で、エンディングが分岐し男キャラごとに一冊ずつ刊行されていた。
大学に入学したらロイエンディングの小説を読もうと楽しみにしていたのに、ついに読まずに人生を終えてしまったようだ。
義理の姉以外だったら誰に生まれ変わってもよかったのに、よりによってこの姉になるとは、つ

いていないにもほどがある。
「通常であれば、オルフェンス公爵夫人であらせられるフィリーナ様のご遺体は、公爵家の礼拝堂に運ばれるべきでしょう」
「だったら、そうすればいいじゃない」
「よろしいのですか？」
メイドが嬉しそうに言った瞬間、横やりが入った。
「そんなことが許されてなるものか！」
「グライフス？　御霊前で騒々しいわ」
「メルティアお嬢様、心配いたしました。このような穢れた場所にいてはなりません。さあ、本邸へお戻りを」
部屋に飛び込んできたのは、グライフス・ドナートだった。
代々オルフェンス公爵家に仕えている家宰だ。
奇妙なことに、真っ先に主人を諫めるべき立場だろうこの家宰は、娼婦まがいのお母様とオルフェンス公爵との婚姻を後押ししている。
私のこともまるで本物の公爵令嬢のように丁重に扱ってくれた。
おかしな男、お人好しなのだろうかと思っていたけれど、小説の内容と照らし合わせると薄々事情がわかってくる。
「グライフス、オルフェンス公爵夫人の居室を穢れた場所などと言うのは、いかがなものかと思

うわ」
「その女はもはや公爵夫人などではございません！　前妻。いや、前妻というのも悍ましい！　化け物を産んだ罪人ッ！」
グライフスの暴言に、水色の髪の少年が舌打ちした。
「……馬鹿親父。仕えるべき相手もわからなくなりましたか」
「カタリナを殺したその化け物に仕える？　おまえこそ早く目を覚ますのだな。その化け物は母親の敵だぞ！」
「母さんの自業自得です！」
「おまえの母さんはその化け物に誘惑されたんだ！　惑わされ、操られたッ！　なんと悍ましい、恐ろしい生き物か！」
十二年も前に読んだ小説の内容を思い出せたのは、幸運だったのか。むしろ不幸かも。
ロイの両親は政略結婚だった。それ自体は普通のこと、貴族なのだ。
だから普通の子どもが生まれれば、そこそこ幸せな家庭になっただろう。
けれど、誕生したロイは常軌を逸した膨大な魔力を持っていた。その魔力は周囲の人間をくるわせる。
彼は、その魔力と美貌に魅了された女や男に襲われた。
当然、ロイは身を守るために戦い――やがて私の目の前で言い争っているグライフスの妻、カインの母親であるカタリナがロイの手によって殺されてしまったのだ。

グライフスについてはカインの過去の話として覚えている。
妻を愛していたグライフスは、妻を殺したロイを憎悪した。
ロイを憎んでいるからこそ、彼は私に好意的なのだろう。
「メルティアお嬢様、すぐにその化け物から離れてください。それともまさか、既に心を惑わされておいでですか？」
「惑わされてはいないけれど、状況に混乱しているわ。あらかじめ教えておいてほしかったわね」
「申し訳ございません。ないものとして扱え、との旦那様のご命令がありましたので……」
オルフェンス公爵家を継承したお養父様は凡庸な男だった。
ほとんど娼婦と変わらない私のお母様に首ったけになって、求婚してしまうくらい。
平凡な幸せだけを望む愚かな普通の男……だから、息子の卓越した能力は手に余った。お養父様はロイを忌諱したのだ。
その結果が、これだった。
「とりあえず、遺体は礼拝堂へ運びなさい」
「メルティアお嬢様⁉　なりませんっ、そのような――！」
「気持ちはわかるけど、こういうのは淡々と合法的に処理したほうが後々問題にならなくていいんじゃないかしら？　書類の上では正妻なのでしょう？」
「確かに、そうではありますが……」
「グライフス、悔しい気持ちはわかるわ。私も、お母様というものがありながら他の女を正妻とし

て扱わなくてはならないなんてとても悔しい」
思ってもいないことを言ってグライフスの心に寄り添う。この修羅場をとにかく平穏に乗り切りたかった。
「でも、余所から見て不当に見えるような扱いをしたら、悪く言われるのは私のお母様なのよ。この子たちみたいに、お母様が嫉妬したみたいに言うに違いないんだわ」
「そうかもしれません……しかし、しかし……」
「もう何もできない死んだ人間を転がしておく場所がどこだって、別にいいじゃない」
ぎり、と誰かが歯を食いしばるような音が聞こえた。
感情を隠せないマルスあたりだろう。私がなんとかご遺体をオルフェンス公爵家の礼拝堂に置こうとしている努力はきっと少しも伝わっていない。
ああもう、逃げ出したくてたまらない。というか、逃げると決めた。
お母様が新婚旅行から帰ってきたら荷物と金目のものをまとめて逃げだそう。
お養父様には悪女に騙されたとでも思って諦めてもらいたい。
ロイはヒロインを取り巻く男たちの中で一番の推しだったから、近くでその活躍を見てみたい気持ちはある。けれど、それはあくまで娯楽としてであって、命あっての物種というやつだ。
何よりも大事なのは、人生。確か、ロイの過去編は地獄だったはず。約束された地獄から一目散に逃げなくてはならない。
だってそうしないと、私は殺されてしまう。

さっきから何度も思い出そうとして細部まではできずにいるのだけれど、あの小説の中で私が死ぬのは間違いない。
なんでこんなに大事なことを思い出せないんだろう。自分の死因なのに。
でも、仕方ない。十二年以上前に読んだ小説だし、しかも私なんか過去編にしか出てこないし、悪役だし、死んでるし。
だからこそ、三十六計逃げるに如かずというわけだ。
この国から出るのもいいかもしれない。
そうすれば、『光の王女』のストーリーからは間違いなく逃れられる。
過去編で覚えているのは、悪役の義姉がロイを差し置いて公爵位を受け継ぎ、やがてロイが奪い返すこと。
……うん？　どうして愛人の娘でしかない私が公爵位を受け継ぐことになるの？
オルフェンス公爵であるお養父様と一滴の血も繋がっていない私が、どうして――
「グライフス様！　大変です!!」
その時、部屋に駆け込んできた真っ青な顔の使用人が家宰であるグライフスに近づいた。
主人のいないこの屋敷の実質的な支配者はグライフスというわけだ。
「どうしたのだ」
「ケルル伯爵、ブシュケッター子爵、リス男爵……その他オルフェンス公爵家のご親族の方々がおいでです」

「何故だ!?　どこからこの女の死が漏れたのだ？」
「いえ、違います。奥様の……いえ、その方の死が原因ではなく……！」
使用人はごくりと生唾を飲む。
一瞬、その視線がちらりと私の上を通ったのがひどく不吉だった。
「旦那様と、クラリス様が……お亡くなりになったのです」
馬車の事故で――と続く使用人の言葉は、ほとんど頭に入らなかった。
お養父様と、お母様が亡くなった……
言われてみれば、私はその事実をとっくの昔から知っていた。
しかも、……本当は事故死ではなかったはず。
事故死に見せかけた、他殺だ。
「今後についての協議のために、ご親族の皆々様方が応接間にてお待ちです」
気づくと、私は駆け出していた。
棺は玄関広間に安置されていた。ご丁寧に、顔の部分の窓が開いている。
「お母様ッ!!」
顔は綺麗なものだったが、血の気のない顔を見ればその死は見間違いようがない。
棺に突っ伏して泣く。
最高の母親ではなかったけれど、私にとってはいい母だった。
前世の記憶を持つ私はきっと異様な赤子だっただろう。それなのに、この母は無邪気に私を愛し

てくれた。無知なだけだったのかもしれないが、私はその無垢な愛に救われていた。
どうして今まで小説について思い出せなかったのだろう。
もっと早く思い出していれば、ここにいてはお母様に危険が及ぶと気づいたはずだ。
泣いて、泣いて、泣いていた――けれど、泣きながら聞き耳を立てている自分に、うんざりする。
なんて薄気味悪い子どもなんだろうと我ながら思う。
だからこそ、身も心も子どものように純粋で美しい母が恋しい。
「久しいな、グライフス」
権力の香りに誘われて集まってきたオルフェンス公爵家の一族の者たちは、母親の亡骸に縋って泣く十二歳の少女の存在など無視して話を始めている。
「ベンヤミン様、お久しゅうございます。新年のご挨拶以来かと」
「うむ。まさか兄上がこのような悲劇を迎えることになろうとは、まったく人生とはわからないものだ。公爵位を継承し、輝かしい人生を送るはずだった兄上が事故死とは」
ベンヤミン、という男の猫撫で声に、何故か全身が総毛立った。
彼は兄上、と口にした。ということは、オルフェンス公爵の弟？
私はこの屋敷に来てまだ半年だ。この家のことはほとんどわからない。
小説の内容を思い出そうとしても、できなかった。
過去編なんて一回しか読んでいないし、モブの人名なんて覚えていない。
でも、いたような気がする。……あまりいい人物ではなかったような。そもそも過去編には、マ

ルスとカイン以外、ほとんどロイの敵しか出てこない。
「兄上が亡くなってしまった以上は、オルフェンス公爵家の行く末について話さなければならないだろう。グライフス、話を聞いているかね？　兄上がフィリーナとの婚姻を過去に遡及してなかったことにした、という話だ」
「なんと――！　それはつまり、ベンヤミン様がオルフェンス公爵家の爵位を継承されるということでございましょうか？」
グライフスの声が警戒心に満ちる。
おやと思った。
この家宰はロイを憎んでいる。だからオルフェンス公爵が亡き今、ロイを後継者として認めたくないに違いない。
それなのに、対抗馬として出てきたオルフェンス公爵の弟のほうを一層警戒しているようだ。
……グライフスが警戒する相手。つまりは、お養父様の敵。
「いや、いや。そうではない。兄上は新しい妻と正式な婚姻を結んだ。そして、その娘を籍に入れている。つまり、公爵位の第一の継承権は妻の娘にあるということになる」
「……血の繋がりはございませんが」
「公爵位の継承にとって血の繋がりは重要ではない。そうではないかね？　もし血の繋がりを重要視するのであれば、伴侶としてオルフェンスの者を迎えてもらえばいい」
「ベンヤミン様はそれでよろしいのですか？」

「無論。それが公爵たる兄上の決めたことなれば」
べったりと貼り付くどす黒いコールタールのような声だ。
貼り付くのは声だけでなく、視線もだった。
私の上に無数の視線が降り注いでいるのが、顔を上げなくてもわかる。ああ、と内心溜め息を吐く。ああ嫌だ、思い出した。
ロイの邪悪な義姉、メルティア・フォン・オルフェンスの最悪な死に方を、思い出してしまった。
――この男によって、嬲り殺しにされるのだ。
メルティアが十六歳の成人を迎えたのを契機に、その身柄を野心のある男たちが狙い、奪い合う。
この義姉は己を狙うケダモノの数を誇りさえし、傲慢極まりない態度で振る舞った。
しかし最後にはロイに公爵位継承の証を奪われ、すべてを失う。
用済みになった義姉はただの美しいだけの女になった。ただただ美しく、傲慢で驕慢なだけに、屈服させがいのあるサンドバッグ。
メルティアを篭絡するために金や時間をかけたにもかかわらず何も手に入れられなかった欲深い男たちは、その憂さを晴らすために彼女を嬲り殺しにしたのだ。
その筆頭がこの男――ベンヤミン・フォン・ケルル。
「メルティア嬢……いえ、美しき公爵閣下。どうか悲しみを堪えて我ら朋輩にご挨拶させていただけませんかな？」
逃げ出したい。けれど私が逃げたら、ロイはどうなるだろう？

私はこの世界で十二年間生きてきた。
貴族社会のことは知らないものの、この世界のことを何も知らないわけじゃない。
オルフェンス公爵の座は、ロイにこそふさわしいのはわかる。
だからその座を狙う者にとって、ロイは敵だ。邪魔なロイを、彼らはどうする？
この国の古い貴族にとって爵位の継承とは、本来、その家の精霊を受け継ぐことを意味する。つまり、精霊を継承する機会を与えないよう、ロイを遠くへ追いやるのが正解だ。
お養父様が死に、一子相伝の口伝が途切れて精霊の在り処がわからなくなった現在、オルフェンス邸に出入りできる者には平等に真の公爵位を継承する機会が与えられていると言える。
誰も私が公爵家の精霊の在り処を見つけるとは思っていないため、警戒しない。
でも、前公爵の息子であるロイは違う。実際、小説のロイは屋敷に四年も留まって精霊を見つけ出し、公爵位の正統な継承者として返り咲いた。
「メルティア嬢？」
「……ちょっと待って。恥ずかしいの。子どものように泣いてしまったんだもの」
催促の言葉に甘えるような声で答える。
十二歳にして男に媚びるやり方を知っているだなんて我ながらぞっとしてしまうけれど、どんな手でも使わなければ生き延びることさえできないだろう。
考える時間が欲しかった。
逃げたい。逃げたいけれど――私が逃げたら、どうなる？

小説では、ロイは十歳から十四歳までの四年間、公爵位を継いだ残忍な義姉に苦しめられ続けた。
逆に言えば四年間は命の危険にさらされることなく生きられたのだ。
この屋敷の中で、精霊の在り処を探し求めながら。
親族の者たちは反対しなかったのか？　……おそらく、義姉に虐められるロイの姿がよほどに面白いショーだったのだろう。
そのショーがなくなって、屋敷から追い出されるだけならまだいい。公爵になれなければ小説とは違ってしまうとはいえ、きっとロイの能力があればどこでも生きていける。
……それよりもありえそうな可能性がある。
ロイは殺されるかもしれない。私が逃げたら。
ゆっくり、できる限り優美に見えるように顔を上げていく。
最近は授業を受け始めていたので、貴族の目から見ても見苦しくはないはずだ。
「あんまり見ないでちょうだい。今の私はきっと可愛くないから」
「そんなことはありませんぞ！」
「おお……なんとお美しい」
「母親そっくり。いや、それ以上だ……！」
男たちの粘つくような欲深い眼差しが注がれることこそが誉れとばかりに微笑む。
彼らが私への警戒心を完全に捨てたのをひしひしと感じる。彼らの目に映る私は、無力で傲慢な幼い娼婦だろう。

心が凍てついて、震え出してしまいそうになるのをこらえながら、微笑み続けた。
「皆さん、お話を聞かせてくれる？　信じられないようなお話が聞こえた気がしているのだけれど」
「信じられないのも無理はない。君はこのオルフェンス公爵家の継承者となったのだよ」
「まあ、本当に？」
「本当だとも。これからこのオルフェンス公爵家は君のものだ」
「素敵……」
母親の棺の存在など忘れたかのように大広間の壮麗な内装をうっとりと眺めながら、自分は何をやっているのだろうと呆れる。
彼らは私への警戒を解いた。私のことを、愚かな娼婦だと思っただろうから。
そんなふうに思わせて、どうする気？
この屋敷から逃げ出すなら、こんな不愉快な演技をする必要なんて少しもないのに。
――小説の中のメルティアがロイにした仕打ちを思い出したのは、運がいいのか悪いのか。
「じゃあ、あの女の遺体を礼拝堂に運ばなくてもいいってことねっ！」
手を打つ私。視界の端で、カインがマルスを全力で抑え込んでいるのが見えた。
ケルル伯爵が灰色の目を細めて言う。
「あの女？」
「前妻の女がついさっき亡くなったの」

「フィリーナが？」
「そう！　正妻だというから礼拝堂に運ばせようと思ったのだけれど、遡って結婚しなかったことになっているのなら、お養父様とお母様の眠る場所に他の女を連れていかなくてもいいってことでしょうっ？」
弾む声。嬉しそうに見えるだろうか。
何を言っているんだろう。何をやっているんだろう。
ロイが私を見ていた。きっと私は憎まれるに違いない。
「なるほど、フィリーナには憐れなことだが、確かに公爵家の人間として扱う義務はなくなったな」
「そんなことが許されるわけがあるか!!」
騒いでくれたマルスのおかげで、小説の展開を再現しやすい。
きっとこれは、ロイがメルティアを憎悪するきっかけとなったエピソード。
そして、おそらく……これこそがロイとメルティアが手を結ぶことは絶対にないだろうと、一族郎党どもが心底安堵した出来事に違いないから。
「だったら、条件次第で許してあげてもいいわよ？　ねえロイ」
「条件？」
「――あなたが三回回ってワンと言えたら、あなたのお母様を公爵家の礼拝堂に眠らせることを考えてあげてもいいわ」
「お、おまえーッ!!」

マルスはグライフスに羽交い締めにされて黙らされた。
グライフスの顔はロイを侮辱できる喜悦に歪んでいる。彼の信頼を得ることもきっとできただろう。
逃げ出すなら小指のつま先ほども必要のないシロモノなのに。
「うるさいわねえ。外野は黙ってて。ねえロイ？　あなたはどうする？」
ロイは無表情だ。きっと腸は煮えくりかえっているのだろう。
それを感じさせない鉄面皮のまま、彼は父親の棺を一瞥して立ち上がる。
きっと、最愛の母親のための苦渋の決断だ。
我が物顔でオルフェンス公爵家の大広間にのさばっていたケルル伯爵をはじめとした貴族たちは、物見の姿勢を取っている。誰一人、自分たちの親戚の子であるロイを庇おうとしない。
ロイはのろのろとその場で三回回った。
「ワン」
「あは」
確か、小説ではここに挿絵があった。ロイの義理の姉の、醜悪な笑顔の絵。
それを忠実に再現するよう努力する。マルスは頭から煙を出しそうだったし、カインは暴れこそしないものの私を暗い目で見すえていた。
ロイの表情だけが読めない。とはいえ小説を読んでいるから想像はできる。
きっと、内心は屈辱に塗れているだろう。

「んーっ。はい、考えてあげたわっ！　きゃははは！　あの女の亡骸は適当に教会にでも持っていって」
すぐに怒号があがるかと思ったのに、少年たちは、私の悪辣極まりない冗談をにわかには理解できなかったらしく茫然としていた。
今ロイたちを屋敷から追い出せば、公爵にはなれなくても生き延びられるだろうか？
いや、きっとそうはならない。ケルル伯爵はきっとロイを殺害するだろう。後顧の憂いを断つために。
私はさりげなさを装って言う。
「あんたたち、今日から家なし子？　可哀想だから、私の召使いとしてならここに置いてあげるわ」
「ぎ、ぎ、ぎぃーっ!!」
暴れ出したマルスをグライフスを始めとした大人が三人がかりで押さえつけている。
カインは項垂れて震え、ロイは――
その顔を見る勇気はなくて、私は顔を逸らしてその場から立ち去った。

＊　＊　＊

フィリーナ様のご遺体が運び込まれた教会を遠くから見ながら、マルスは煩く唸り続けていた。

集まって来た野次馬どもの好奇の視線に晒されるフィリーナ様があまりに痛ましい。
だが、ロイ様まで衆目に晒すわけにはいかず、オレたちは見守ることしかできないのだ。
「あの、女！　あの女、あの女～ッ！　殺してやるッ！」
「マルス、軽挙はやめてください」
「腰抜けカインめ！　臆したか⁉」
「ロイ様のためにこそ、やめろと忠告しているんです！　わからないんですか⁉　わからないんでしょうねえ！　この筋肉馬鹿が‼」
「誰が筋肉馬鹿だ！　弱いくせに生意気なんだよッ！」
「二人とも、黙れ」
ロイ様に命じられると血の気の多いマルスがぴたりと口を閉ざす。
マルスは獰猛なけだものだ。
それなのに、どんな激昂の最中でもロイ様に命じられれば忠犬のごとく従う。
ロイ様には猛獣使いの素質があるに違いない。
「カイン、おまえの見解が聞きたい」
「はいっ」
ロイ様がオレをご指名くださった。マルスに比べれば誰だって聞くべき意見を出せるだろうけれど、それでも嬉しく思いながら口を開く。
……舌に乗せる言葉は苦々しくて、すぐに意気消沈してしまったが。

「あの女の存在は至極不愉快ですが……あの女がいるうちは、ケルル伯爵に殺されることはないかと思います」
「義姉上を防波堤にするのか」
「義理とはいえあんな女を姉と呼ぶ必要はないです、ロイ様！」
「その点だけはマルスに賛成です」
ロイ様は小首を傾げたものの「それで、この先どうするべきだと思う」と話を変えた。
「一刻も早くオルフェンス公爵家の精霊を継承するべきです」
「口伝は途切れた……自力で探すしかないか」
「もしかしたら父は何かを知っているかもしれませんが……オレたちには決して教えないでしょう。申し訳ありません」
「おまえが謝ることはない」
「いいえ、オレが謝るべきことです」
母は乳母でありながら、ロイ様の信頼を裏切り悍ましい行為に及び、ロイ様に返り討ちにされた。父はそれを逆恨みし、本来仕えるべきロイ様を憎悪している。
信じがたい愚劣さだ。彼らの血が自分の身体の中に流れていると思うと吐き気がする。
オレにとって化け物とはロイ様を襲った母であり、それを庇う父だ。
だが、もしもロイ様こそが化け物だというのならオレも化け物になりたい。
あの悍ましい両親と、別の生き物になりたかった……

「猶予はどれくらいある？」
ロイ様は気にした様子もなく話を続ける。
オレは気を引き締めた。オレの懺悔にロイ様を付き合わせている暇なんてない。
「あの女が婚姻できる年齢になるまで。……四年ほど、でしょうか？　ですがこれは希望的観測で、もっと短くなってもおかしくありません」
「誰が精霊を見つけてもおかしくねえからな」
オルフェンス公爵家の精霊がこの屋敷にいることは間違いないのだ。くまなく探せば、マルスの言う通りやがて誰かに見つけられてしまうだろう。
ロイ様が淡々と言った。
「ヤツら、僕が邪魔な存在だと気づいて、さっさと殺しておこうと考えることもありうる」
「俺が絶対に守ります!!　命をかけて!!」
弾かれたようにマルスが叫ぶ。
マルスは十五歳。だが、こいつに剣を持たせたら、大人でもそうそう敵わない。
剣の師に天賦の才を見出されたものの、その強さと気性の激しさから来る危うさに、主を持つまでは修業をするなと戒められて旅をしていたヤツだ。
そして、この屋敷に辿り着いた。
ロイ様という主を得て、心服したがゆえに離れられなくなって修業を中断しているのは、まったく馬鹿げているものの……こいつの存在があったからこそ、今日までロイ様を守れた。色々と、鼻

につくが目を瞑るべきだろう。
「マルス、おまえの忠心はありがたいが、やりすぎると屋敷を追い出されてしまう。そうなると精霊を探せない」
「うっ、そ、そうですか」
「義姉上に対しても、手をあげるなよ」
「ですが！」
「母上を想ってくれているのはわかるが、僕の邪魔はするな」
「ううっ。はい」
「それに義姉上はおそらく……いや、何でもない」
ロイ様は何を言いさしたのだろう？
気になったけれど、口にするのはお辛いかもしれないと思って疑問を呑み込んだ。
容姿が美しいだけに毒々しく悍ましい、あの女。
マルスとは違う意味であの女の存在は有用だ。使い道を誤れば毒薬だが。
「ン？　今、教会の裏から誰か出てきたぞ」
その時、唐突にマルスが言った。
こいつが言うなら間違いないだろう。何しろこいつは獣じみた超常的な感覚を持ち合わせている。
「マルスがそう言うのなら、司祭とかではなさそうですね」
その者の様子に違和感を覚えた、という意味だ。

ロイ様が頷くのを確認して、オレたちは教会にこっそりと近づいていく。
教会裏の墓地で背を丸めて掌の中を眺めていたのは、やけに小さな人影だった。
「よかった。崖下に放り込まれた後だったら探すのが大変だもん……」
「おい！　そこで何をしている？」
「キャッ!?」
「……女？」
しかも、オレたちとそう年齢の変わらない子どものように見える。
だが、オルフェンス家門の人間にも見えない。外套のフードを目深に被っていて顔は見えないが、その服装は平民のものだ。
「教会で何をしていた？」
「別に、何も！」
ロイ様の表情を窺うと、僅かに眉を顰めておられるのがわかった。
この方は他者の言葉を聞くことで、その言葉の嘘と真を聞き分けることができるのだ。耳で聞くものにおかしな言い方ではあるものの、魔眼の一種らしい。
つまり、この顔を隠した少女は嘘を吐いている。
「ううん、何もじゃ嘘になっちゃうか。えっとね、そのうちわたしのものになる予定のものを、早めに受け取りにきただけよ！」
「……本当のことを言っているようだ」

ロイ様が、むしろ嘘を吐かれた時よりも警戒を滲ませた表情で言った。
「それにしても、本当にちっちゃい！　ボロボロだし！　かわいそ可愛い～っ！」
「……あ？」
「やだあ。マルスの顔こわーい」
この少女はオレたちのことを知っているようだ。
まあ、腹の立つことにこの町の人間なら誰でもオレたちの不遇を知っているだろうし、ロイ様の顔を見ればすぐに誰だか察するに違いない。
少女はロイ様のほうに向き直ると、わざとらしく咳払いした。
「ロイ様、ごめんね！　わたしたち、まだ会えないの」
「は？」
「わたしが持っていたほうが有用だから、早めにこれを取りにきただけなの！　その時になったら、ヒロインであるわたしが助けてあげるから待っていてね！」
わけのわからない言葉にオレたちが呆気にとられる中、少女はそそくさとその場を後にする。
ロイ様はその後ろ姿を胡散臭げに見すえていたが、マルスに追うよう命じることはなかった。
だが、すぐに追わせるべきだったと後悔することになる。
教会に忍び込み、フィリーナ様のご遺体が納められた質素な棺桶を確認し、ロイ様が息を呑んだ。
「……母上の指輪が、ない」
すぐに盗まれたのだと理解する。それに、誰が盗んだのかも。

「あの女!?　すぐに追います！」
「待て、マルス。自分のものだと言わんばかりのあの言葉が気に掛かる。今は捨て置け」
「ですが、ロイ様!!」
「僕たちには、力がない」
「今はまだ、ということですね？」
オレが付け加えると、ロイ様が「そうだ」と頷いた。
「木でできた、ただの指輪……そのはずだ。力を得てから取り返せばいい」
オレも見たことがある。フィリーナ様の華奢な指に嵌まる、素朴な指輪。
没落した実家から持ってきた、ほとんど唯一の装飾品があれだったはずだ。母の形見だと言って。
あの少女が『有用』だと言っていたのが気になるが、もしも本当に何らかの力を持つのであれば後々も探しやすいだろう。
「クソ、クソッ！　どいつもこいつも、フィリーナ様をバカにしやがって……！」
率直に怒りを表すマルスを見て、ロイ様がかすかに微笑んだ。
こういう単純なバカが傍にいることで、あまり感情を表に出さないロイ様のお心が慰められていることがあるのだろうか。
だとしたら、せいぜい役に立ってもらおうか。オレは、オレのやり方でロイ様のお役に立ってみせる。
そう誓った。

＊　＊　＊

亡骸を教会に送ってあげただけでも感謝してほしいくらいだった。小説の中の義姉ならば、ロイの母親の亡骸を屋敷裏の崖から捨てさせるのだから。
その行為自体、小説のメルティアとしては、死体用の穴に放り込む程度の感覚だったのかもしれない。貧民街で生まれ育った少女らしい感性と言えばそうだ。
だけど、それを見るロイにどんな衝撃を与えるかわかっていてそこまでの蛮行はできなかった。
そうまでしなくとも、十分に憎まれていることはマルスを見ればよくわかる。
「あらあ、ロイ。使用人のお仕着せがよく似合うわ」
「お褒めいただき光栄です」
似合いすぎて頭がくらくらした。
身体にぴったりと合ったシャツにタイ、サスペンダーに半ズボン、白い靴下、ピカピカの革靴。
こんなものを着せたのは、小説でもそういう格好をさせられていたからだ。
できる限り小説に沿ったほうがロイの身の安全を確保できるだろう。
お養父様とお母様の葬儀を終えて、私は晴れてオルフェンス公爵家の当主として君臨していた。
とはいえ実務はすべて丸投げしている。丸投げ先はグライフスだ。
ケルル伯爵や他の親戚たちは率先して仕事をやりたがったけれど、彼らに執務を任せるのは不安

だった。明らかに欲の皮の突っ張った人間しかいないのだ。
小説では義姉が当主として君臨した四年間で、オルフェンス公爵領の経営はひどく傾いたと書かれていた。だが、彼らを見ていると、義姉の放蕩だけが原因ではなかったのかもしれないと思う。
幸い、グライフスはロイを憎んでいること以外はまともな男だし、執務も任せられる。
そのせいでグライフスとケルル伯爵たちとの間で対立が深まりつつあるみたい。
彼らの間で板挟みにされるのは勿論私で、胃が痛い。
……一体、いつまでこんな思いをしなければならないのか。
「これを僕に着せるために、メイドが僕の身体中に触れましたが、義姉上の指示ですか？」
「はあ!?」
勢いよく振り返ると、動揺するメイドと目が合った。
二十代後半の女だ。ロイや私にとっては母親でもおかしくない年齢の女。
ぞっと怖気だつ。マルスとカインは一体どこにいるのか。
おそらく精霊を探しているのだろうけれど、まずは主人を守れと言いたい。
そして、頭のおかしい女を排除するにも工夫しなければ。
「あなた、この子に気があるの？」
「ち、違います。そんな不気味な子の言葉を信じるのですか？」
「信じる、信じないじゃないわ。あなたが私を裏切っているかいないかの話なのよ？　あなたがその子に気があるんなら、その子に協力したい気持ちになるんじゃないかしら。私を裏切って、公爵

位をその子に与えたいと考えているんじゃないかしら！」
「そんなことは決して！　決してありえません!!」
「信じられないわ。いつ寝首を掻かれるかわからない。あなたはクビよ！　――連れていきなさい」
「メルティア様！　公爵閣下！　お許しください！　お許しを――」
引きずられていく性犯罪者を見送って、溜め息を吐く。
子どもに手を出したからではなく、私を裏切ったから処罰する。そういうことにしておかなくてはならない。ロイを守っていると思われてはならないのだから。
一体、私は何をしているのだろう……
こんな場所にいたら、敵を作るばかりでいずれ殺されてしまうのに。
ロイと私以外の人員が全員出払ったタイミングで、ロイが口を開いた。
「義姉上、ありがとうございます」
「はあ？　何そのお礼。意味がわからない。頭がおかしいの？　私はあなたの味方を排除したのよ？」
私がロイを庇っているように感じたのだろうか。
それは事実だけれど、そう思われないよう心を砕いているのだ。お礼を言うなんてやめてほしい。
「ねえ。あなた、逃げ出さないの？」
「逃げる、ですか。他に行き場がありませんので」

「王都に小さな屋敷があるらしいわ。あなたの母親の持参金の一つよ。お母様の恋敵の持ち物なんて私はいらないから、あなたにあげてもいいわ」
そういう論調でグライフスを説得できるだろう。
王都なら人目がたくさんある。ロイたちなら暗殺の危険も少なくできるんじゃないだろうか。なんなら、この子たちが身を守るための資金をこっそり屋敷に仕込んでおいてもいい。
「そこで細々と暮らしたらどうかしら？　生活費がないっていうのなら、多少なら恵んであげてもいいわ」
ロイの身の安全さえ確保できれば、私もここから逃げられる。
どうせ精霊は簡単には見つからない。
精霊の隠し場所には魔法がかけられていて、そこに隠し通路があると知る者以外には見つからないようになっている。一子相伝の口伝が途絶えた場合、見つける方法はただ一つ。
精霊に認められ、招かれること。
小説で、ヒロインの光の王女が認められて光の精霊を見出したように。
この屋敷に詰めかけている親戚連中が精霊に認められるはずがない。
だから、しばらく放置しておいても大丈夫だろう。ロイが成人するまでは保つと思う。
でも、万が一ということがある。誰もがそう思っていた。どこかに手がかりがあるかもしれない。誰かが糸口を握っているかもしれない。そんな期待と不安で、誰もがこの屋敷から離れられないでいる。

そんなことは絶対にないのに。
小説のロイが精霊の在り処を見つけられたのは、生まれて間もない赤子の頃、おくるみに包まれ父親の腕に抱かれて、精霊の在り処に連れていかれた記憶を思い出したからだ。
叔父たちに命を狙われ、死体袋に入れられ棺桶に閉じ込められ――包まれた感覚、閉所の暗闇、死の気配が、ロイにとってもっとも愛情深かった頃の父親の記憶を残酷に喚起した。
「ねえ、出ていきなさいよ。ここは私の家なんだから！　悔しかったら、成人した後で権利の申し立てでもすればいいのよ」
万が一、精霊が手に入らなくても、ロイが正当な権利を主張して裁判を起こせば公爵位を取り返せるだろう。私とロイでは、明らかにロイに正当性がある。
ただし、誰かが精霊を継承していなければの話だ。
「この屋敷を離れたくありません。ここは、僕にとっても家なので」
ロイが目を伏せる。睫毛の長さに腹が立った。
精霊探しを諦められないという意味だろう。
私は当然、精霊の在り処を知っている。オルフェンス公爵家の礼拝堂の祭壇の下、隠し通路の先の隠し部屋に、精霊の書が安置されている。
ロイに精霊の在り処を教えたらどうなるだろうか？
おそらく即座に精霊を継承し、私から公爵位を奪い返そうとするだろう。
でも、それだけはさせられない。

精霊の継承は肉体に負担のかかる儀式だ。
平時の場合では、成人男性が一年以上の時間をかけて精霊を継承する。
けれど、ロイにはそんな猶予はない。
精霊の継承が始まれば派手なエフェクトが発生して周囲に知られてしまう。欲に塗れた親戚連中は、彼を殺して精霊を横取りしようと殺到するだろう。小説ではそうなったのだから、まず間違いない。
ロイは身を守るためにも、短時間で精霊を継承し、精霊を扱えるようにならなければならない。十歳の成長しきっていない器にはあまる力を得るために、その身を犠牲にするしかないのだ。
小説の中の十四歳のロイの肉体ですら、精霊の継承に耐えきれずに後遺症を背負った。
私の忠告なんて聞くはずのないこの子どもに、そんな話を打ち明けられはしない。
「気づいていないの？　みんな、あなたのことが嫌いなのよ。親戚のはずなのに、あなたのことを死ぬほど邪魔に思ってる」
彼らはそれぞれ理由があってオルフェンス公爵家に群がっている。野心があったり、お養父様に恨みがあったり、オルフェンス公爵家との因縁であったり、金のためであったり、色々だ。
酷いことを言っているとは思うけれど、これが現実なのだから正しく認識してもらわなければならない。この危機を。そして、どうか回避してほしい。
「このままだとあなた、殺されるわよ」
「義姉上、心配してくださるんですか？」

「そんなわけないでしょ！　馬鹿なんじゃないのって言ってるのよ!!」
ダメだ。暖簾に腕押しになっている。
小首を傾げるロイに上目遣いに見つめられ、頭の芯がじんと痺れた。
彼の仕草の一つ一つが、私を惑わせようとしているとしか思えない。
馬鹿げた話だ。グライフスと同じようなことを思っている。
誘惑されているんだろうか？　そのせいで、私はロイを捨て置いて逃げられないの？
前世の時からの推しだから？　一番幸せになってほしい男キャラだったから？
――いや、それ以前に、ほんの十歳の子どもだからだ。
放りだせば死ぬとわかっているのに、しかもそうなった原因は私がここへ来たせいなのに、そう簡単に見捨てて逃げ出せない。
「――メルティア様、ライナー卿がお越しです」
「先生が？　すぐにお迎えに行くわ！　――ロイ、ついてきなさい」
ちょうどよいタイミングで現れたメイドの先触れを受けて、ロイを問い詰めるのは一旦おしまいにした。
玄関大広間には精霊探しで疲れた親戚たちがたむろしている。
彼らに見せびらかすようにロイを引き連れていく。
女主人となった娼婦の娘にひれ伏す、惨めな前公爵の息子。
その零落した姿を、親戚たちは面白がるように眺めている。

そんな異様な雰囲気に、大広間に足を踏み入れたライナー先生が一瞬怯んだのが見えた。
けれど、私の姿を目にして温かみのある笑みを浮かべて近づいてくる。
「ご両親のお話をお伺いしました。お悔やみ申し上げます、メルティア様……こうお呼びしてはご無礼になるでしょうか。公爵閣下？」
「いいのよ、先生。メルティアと呼んで。もう先生は来てくれないかと思ったわ」
「亡きオルフェンス公爵閣下よりメルティア様の教育を任されているのですから、それを途中で放り出すようなことはいたしませんとも」
ケルル伯爵たちにオルフェンス公爵家の執務を任せていたら、真っ先にライナー先生は辞めさせられていただろう。傀儡でしかない私に余計な知恵を付けさせるのは面白くないだろうから。
現に、小説にはライナー先生の存在はない。
改めて、グライフスにすべてを任せてよかったと思う。
「私もお養父様とお母様が選んでくださったライナー先生が恋しかったわ」
「メルティア様にそう言っていただけて光栄でございます」
お母様を愛し私に甘い顔を見せていたお養父様が選んだだけあって、ライナー先生はよい先生だ。
詳しい経歴は知らないけれど、これまでに何回か教わっただけでわかる。
生まれで蔑むことなく、文字の読み書きすらわからないレベルの私に丁寧にわかりやすく教えてくれた。だが、本来はもっと高度な教育ができる人なのだろう。
私にはもったいない先生だ。だから、ありがたく教育を受けよう。

この屋敷に留まらなければならない以上、せめてできる限りの知識を詰め込んでおきたい。
「ロイ、ライナー先生の荷物をお持ちしなさい」
「その子は……」
「気にしなくっていいわ、先生。ただの小姓だから」
ライナー先生は複雑そうな眼差しでロイを見つめる。
ロイが何者なのかということくらい、ご存じなのだろうけれど何も言わず、彼に荷物を預けた。ロイも無表情で受け取る。
向かう先は地階の勉強部屋だ。既に勉学の準備は整っている。
「本日はこちらの本を読めるようになるための、スペルの法則についてお話ししたいと思います」
「文字の読み書きは大体できるようになったわ。次の段階に進んでもらうことはできないかしら？それとも、教材を用意していないから難しい？」
「読み書きがもう？　しかし、まだ要点しかお教えしておりませんが」
「言葉は話せるんだから、文字さえ覚えれば読めるようになるわよ。法則の細かいところはわからないかもしれないけれど、それは読む本の数を増やしていけばそのうち解決すると思っているわ」
この国の言葉は表音文字だ。話せれば、あとは二十八個のアルファベットを覚えることで大まかになら読めるし書けるようになる。
「確かに、メルティア様の仰る通りですね」
ロイもまた、文字の読み書きはできるようだ。私が公爵になって届くようになった膨大な量の手

紙を朗読させたり、その返事の代筆をさせたりしてみたから知っている。
壁際に立たせたままのロイのほうを見ないように意識しながら、私は先生を見つめた。
「授業はどんどん進めてほしいの。だって私、オルフェンス公爵になってしまったんだもの。勉強しなくてはならないことがたくさんあるのよ」
「素晴らしい心がけでございます。ですが、メルティア様の理解の速度に合った勉学をするのが学習の一番の近道となるでしょう」
「ノートを作るわ、先生。それをチェックしてもらえるかしら？　私が理解できていない、と思ったら授業の速度を緩めてちょうだい。そうでなければ速めてちょうだい」
「それはよい方法ですね」
ライナー先生は少し驚いたように目を丸くしている。
口出ししすぎた？　焦っているように見えた？　私の思惑が露見した？
だとしても、ライナー先生はケルル伯爵たちとは立場が違うから問題にはならないはず。
それから、ライナー先生は様々な分野の質問を織り交ぜながら授業を進めていった。おそらく私の理解度を測っていたのだろう。
私はといえば、ノートを取りながら日本語でメモしたくなるのを堪えるのが何より大変だった。
慣れない文字で書き取りをしながら、欲しい知識を取捨選択していく。
けれど、私にとってのみ必要な授業であってはいけない。
後ろで聞いているだけできっと授業内容を完璧に理解しているであろうロイが、やがて公爵にな

る時に役に立てられる内容でなくては。でなければ、壁際に立たせている意味がなかった。

＊　＊　＊

ライナー先生は壁際に立つ僕を憐れみの眼差しで見つめていた。先生ですら気づいていない。
僕のための授業をさせようとしているという、彼女の企みに。
つまり、僕が感じているより彼女の演技は巧みなのだろう。
あれほど、わかりやすいのに。
（義姉上の目的は一体、何だ？）
人の心を惑わせるという僕のこの顔立ちを近づけてみても、誘惑される様子はない。
悪役を演じてまで僕を助けようと茨の道を歩んでいる、彼女の目的が未だ、わからなかった。

第二章　子ども時代後編

最近、マルスに睨まれていると安心感を覚える私がいる。
マルスが激怒しているということは、つまり笑顔の仮面で感情を隠している貴族の親戚連中は、心の中でもにっこりしているだろうということだから。
「ロイ〜、力が弱いわよ。これじゃ全然肩こりがよくならないわ」
「申し訳ありません、義姉上」
ロイに肩を揉ませながら、私は溜め息を吐いた。
あれから二年が経過している。私は十四歳に、ロイは十二歳になった。
精霊探しは暗礁に乗り上げて既に久しい。屋敷中の探せる限りの場所を探し尽くした親戚たちの中には、諦めて領地に戻った者も多かった。
だが、往生際の悪い者もそれなりにいる。
その中の一人は当然、ロイの叔父のベンヤミン・フォン・ケルル伯爵だ。
「メルティア、これなど君に似合うのではないかね」
応接間の机に、宝飾品の数々が広げられている。どれも煌びやかで、前世でも博物館くらいでしかお目にかかったことのない代物ばかりだ。

ケルル伯爵に差し出されたルビーらしき赤い石が豪奢に鏤められたネックレスを受け取り、私はほうっと熱い溜め息を零してみせた。
「本当？　この素敵なネックレスが私に？」
「これなども君の美貌を引き立てる」
「この緑の大きな石、まさかエメラルド？」
「君の美しい緑の瞳の輝きには劣るがね。エメラルドに相違ない」
つゆ型にカットされた大粒のエメラルドを使ったイヤリングを耳元に宛がわれる。
首筋を晒す姿勢に本能的な危機感を覚えたけれど、にっこり笑った。
「おじさまほど素敵な紳士は初めて見るわ！」
ケルル伯爵のことを、私はおじさまと呼んでいる。
お養父様の娘なのだからと叔父と呼ぶように促されたのだ。
今日は朝からプレゼントがあるからと部屋に押し入られそうになり、なんとか応接間に場所を移してロイを一緒につれてきた。マルスとカインはついでだ。
ケルル伯爵と二人きりになるのは恐かった。
私は確かに美しい。鏡を見る度に、この顔が自分のものであることにびっくりする。
黄金の滝のような金の髪にエメラルドのような緑の瞳。
お母様によく似ているものの、お母様より美しく思えるのはケルル伯爵がエメラルドよりも美しいと評したこの瞳のおかげかもしれない。

私自身、うっとりしてしまうほど美しい瞳だ。
光の角度によって虹色に輝く深く透き通ったグリーン。
鏡越しにしか見られないのが惜しいくらい。
とはいえまだ十四歳でしかない私を見る、この男の眼差しは異常だ。小説では四年もの間この男を二階の客間に住まわせながら自制させ、均衡を保ち続けていたなんて信じられない。
まだ半分しか経っていないのに既に死にそうな思いをしている私は、小説の悪女な義姉の手腕をちょっぴり尊敬しそうになる。
「メルティア、実は君に相談したいことがあるのだよ」
「おじさまが私に？　珍しいこともあるものね」
「君が、君にとってもっとも警戒すべき政敵を優遇しているのではないかという声があがっているのだ。放置しておいては、君の身が危うくなるのではないかと皆が心配している。無論、私もだ」
そう言って、ケルル伯爵は私の後ろにいるロイをじっとりと見つめた。
つまり、私がロイを優遇しているように見えるということだろう。
実際、ロイの身に危険が及ばないようにあれこれ手を尽くしてきたのだ。いくら表向きは軽んじているように見せても限度がある。
遂にこの時が来てしまった。いずれ指摘されるだろうとは思っていた。
だから、とっくに答えは用意してある。
「おじさまたちから見ても、私ってロイを優遇しているように見えるわよね？」

「うむ。君の対応は手ぬるいように思うが、自覚があるのかね？」
鋭く斬り込むような視線、べったりと貼り付くような声だ。
ロイと私が手を結んだら、ケルル伯爵たちにとって大きな障害となるだろう。
そんなことはありえないのだと、安心させなくてはならない。
小説の知識を使う時が来た。
「これだけ優遇されているのに……おじさま、信じられるかしら？　この子たち、私のことを恨んでいるのよ！」
「……ふむ」
「ロイは顔色が変わりにくいからわかりづらいけれど、子分を見るとわかりやすいわ。この子たち、怒っているの。全部私のせいだと思っているのよ。これだけ恵まれているのに、自分たちこそが世界で一番不幸だと勘違いしているの！」
「確かに、そのようだな」
「だから私ね、この子たちにその勘違いにふさわしいだけの、本当の不幸を味わわせてあげたいのよ！」
ケルル伯爵が目を瞠る。
それは、ケルル伯爵も抱いたことのある思いだったろう。
お養父様は長男であるという理由だけでオルフェンス公爵位を継ぎ、何不自由なく暮らしながらも何かが足りないと自分の不幸を嘆き続けてきた。

その姿を見て、弟であるというだけで公爵位を逃したケルル伯爵が覚えた憎悪。その嘆きに見合う不幸を与えよう――ケルル伯爵が考えたことである。その描写を、二年かけて思い出したのだ。
親戚連中の中心的な人物がケルル伯爵だった。この男の心を動かさなければならない。
逆に言えば、この男の心さえ動かせればいいのだ。
「ふむ……この状態はあくまで通過点にすぎない、ということかな」
「その通りよ、おじさま。私ね、成人して社交界にデビューする私の姿をロイに見せてあげたいの」
「ほう、それはそれは」
「ロイではなく、この私こそがオルフェンス公爵だとみんなに認められる、その瞬間を」
壁際でカインは息を呑み、マルスが真っ赤になって打ち震えている。
後ろにいるロイがどんな表情をしているかだけがわからない。
「確かに、ぬるま湯の中で忘れ去られていくほどの屈辱はない」
「私、この子たちを見た瞬間に嫌いになったわ。明日の食事にこと欠いてひもじい思いをしたこともないくせに、着る服も上掛けもなく寒い冬を乗りこえたこともないくせに、自分たちが一番可哀想だという顔をしているんだもの」
「まったく傲慢極まりないことだ。君が嫌悪を覚えるのも当然だ」
「だからおじさま、どうか邪魔をしないでね」
これは私の復讐なのだ、と――そう伝わることを願ってケルル伯爵を見すえた。

彼に感銘を与えられただろうか？
失敗していたら、苦渋の決断を下さなくてはならなくなる。小説の義姉がしていたように、ロイに屈辱的な虐待を与えなくてはならない。
それ以外に、ロイをこの屋敷に置きながら命を守るすべを思いつかなかった。
じっと私を見下ろしていたケルル伯爵が不意に私の手首を掴む。
「え？　――ひっ!?」
手首を掴み引き寄せて、彼は私をその腕にかき抱いた。
「君はなんと聡明なのだろう。私は君ほど素晴らしい女性に会ったことがない！」
悲鳴を呑み込みきれない。だが、ケルル伯爵は気にした様子もなく私を抱く腕に力を込めた。
悍ましくて身体が反射的に強ばる。だが、ダメだ。
普段、私はケルル伯爵に心を許したように演技している。
それなのに抱かれたくらいで硬直していては、本心では嫌っていることが露見してしまう。
身体から力を抜かなくては。身を委ねなくてはならない。この骨張ってかさついた男の腕に抱かれて、心底安堵しているという演技をしないといけない、それなのに――
「勿論、私は君の邪魔などしない。するものか。私だけは何があろうと君の味方だ。きっと、私だけが君の本心を理解できるであろう……」
甘ったるい香水のにおいがケルル伯爵の体臭に混じって吐きそうだ。
気を紛らすため、必死で唯一自由な目だけをぎょろぎょろと動かした。

まるで助けを求めるように。
だけど、この場の誰も私を助けられないし、助ける気のある人間もいるはずがなかった。
「おやおや」
不意にケルル伯爵が低い笑いを漏らす。
「見てご覧、メルティア。前公爵の愚劣なる息子が理不尽にも私たちを睨んでいる」
私はケルル伯爵の腕の中から首を巡らしてロイを見やった。
彼は珍しく感情を露わにしていた。唇を噛みしめ、拳を握って震えている。真っ白な頬に血が上り、紫色の瞳が朱に染まっていた。
その顔を見ているうちに、ケルル伯爵の腕の中にあっても身体から力が抜けていく。
「私が君を助けよう。メルティア。だから君も、私を助けてくれるだろう？」
頭を撫でられる。吐き気がしたけど、ロイの顔を見ていると耐えられた。
次の瞬間、応接間の扉が開く。
「公爵様！　大変です、グライフスが倒れました！　医師によると卒中とのことです。意識がなく危ない状態だそうです！」
私を抱く男が腹の中で笑ったのが、かすかな振動でわかった。
この男が邪魔なグライフスを排除したのだ。
私のせいで――私が、グライフスに仕事を任せたせいで。
恐ろしくて身体が震えそうになるのを堪え、微笑む。

「……おじさま、早速助けていただきたい状況になったわ。執務をお願いできるかしら？」
「君の頼みとあらば喜んで、メルティア」
ケルル伯爵に仕事を委ねるしかない。そうしなくては怪しまれてしまう場面だ。
名残惜しげに見えるよう慎重にケルル伯爵の腕から逃れ、私はソファから立った。
「グライフスの様子を見に行くわ。ついてきなさい――カイン、あなたもよ」
「は？」
私がカインに話しかけるのは初めてだったかもしれない。
ロイのためにあらゆる頭脳労働をこなし、やがて公爵家の暗部をすべて背負って死ぬ男。彼は今はまだ十二歳の、ロイと同い年のただの子どもだ。
面食らった表情をしているカインに、私は再度命じる。
「あなたの父親の危篤の知らせよ。ついてきなさい。命令よ」
「……わかりました」
ロイとマルスと目配せをし合った後、カインは頷いた。

グライフスの部屋に行くと、医師が診察していた。ミレッカー先生だ。
オルフェンス公爵家のお抱えの医師で、グライフスの暗殺に関与しているとは思えない。
――そう、おそらくこれは毒殺だろう。
まだ死んではいないものの、グライフスの青ざめた顔を見るに時間の問題のように感じる。

立ち読みサンプルはここまで

「助かるの？」
「……難しいかもしれません」
「どんなに高い薬を使っても構わないわ。それでも？」
「精霊の力があればあるいは……ですが公爵家の精霊は未だ継承されておりませんし、精霊の継承者である大貴族に協力を仰ぐのに必要なのは金銭ではなく伝手ですので、難しいかと」
伝手を持っているとしたら親戚たちの中でも最も高い爵位を持つケルル伯爵だろうけれど、彼がグライフスのためにそれを使ってくれることなどありえない。
「他にグライフスのためにできることはあるかしら？」
「苦しまないよう、麻酔薬を投与してやることくらいです」
「お金がかかってもいいから、薬は惜しまないで与えなさい。一切苦しまず旅立てるように」
「グライフスは公爵様にお気遣いいただき果報者でございますな」
ミレッカー先生が涙ぐみながら言う。
私は背後を見やった。ロイ、マルス、そしてカインが立っている。
カインは無表情だったが、顔面蒼白だった。
「カイン、父親についていてあげなさい」
「お気遣いは無用です」
「あなたたちの親子仲が最悪なのは知っているけれど、血の繋がった父親には変わりないでしょう。嫌いなら嫌いで、別れの悪態でもついておきなさい。言いたいことが山ほどあるでしょう……まあ、